

日本における中国モダニズムの研究

立命館大学言語教育センター
外国語嘱託講師
城山 拓也

はじめに——中国におけるモダニズム

- 本発表におけるモダニズムの定義

大平具彦「序 多元の海へ」『モダニズムの越境』第一巻「越境する想像力」

昨今、文化の複数性やクレオール思想がしきりと取り上げられるが、モダニズムの運動を少し内部まで掘り下げて検討して見ると、二〇世紀前半から半ばにかけてヨーロッパを中心に北米、ラテンアメリカ、アジア、アラブ等の地域にまで世界的な規模で展開したモダニズム（アヴァンギャルド）諸潮流こそが、その源流となっていることに気がつかないわけにはゆかない。

はじめに——中国におけるモダニズム

- 中国におけるモダニズムへの評価

1 1970年代まで：

茅盾『夜読偶記』（1958）

古典主義→浪漫主義→現実主義→新浪漫主義（現代主義）

2 1980年代以降：

高行健『現代小説技巧初探』（1981）、**徐遲**「現代化与現代派」
(1983)

「近代化〔原語「現代化」〕」された社会には「近代化」された文学が必然であり、欧米の「現代派」「現代主義」を排除せずに、そこから学ぶ姿勢の必要を主張して話題となった。（宇野木洋2006）

はじめに——中国におけるモダニズム

- 民国期中国におけるモダニズムの「発見」

嚴家炎『新感覺派小説選』（1985）

吳福輝『都市漩流中的海派小説』（1995）

Lee, Leo Ou-fan(**李歐梵**) *Shanghai Modern: The Flowering of a New Urban Culture in China, 1930-1945* (1999)

「新感覺派」、「現代派」

→小説なら**劉呐鷗**、**穆時英**、**施蛰存**ら。詩なら**戴望舒**、**卞之琳**、**何其芳**、**痲名**ら。雑誌『無軌列車』、『新文芸』、『現代』、『新詩』などを再評価する。

本発表で行いたいこと

- 日本における中国モダニズムの研究を整理し、いくつかのトピックを提出する
- 以上を通じて、中国モダニズム研究の可能性を模索する

本日のメニュー

はじめに

- 一 狭義の中国モダニズム研究
- 二 広義の中国モダニズム研究
- 三 中国モダニズムをめぐる視点
- 四 新しい研究動向

おわりに

— 狭義の中国モダニズム研究

1 小説（作家、詩人論）

- **劉呐鷗**：張新民、三澤真美恵
- **穆時英**：谷行博、高橋俊、福長悠、田中雄大
- **施蛰存**：斎藤敏康、青野繁治

2 詩（作家、詩人論）

- **戴望舒、卞之琳**：三木直大
- **廃名、穆旦**：松浦恆雄
- **馮至**：佐藤普美子
- 中国現代詩：秋吉久紀夫

一 狭義の中国モダニズム研究

3 中国モダニズム研究：

- 浅野純一（1991）：**施蛰存、穆時英、張天翼**
- 李征（1998）：**劉呐鷗、穆時英、施蛰存、横光利一、十一谷義三郎、池谷信三郎**
- 銭暁波（2007）：ポール・モーラン、横光利一、**劉呐鷗、穆時英**
- 鈴木将久（2012）：**茅盾、戴望舒、瞿秋白、穆時英、路易士、陶晶孫**
- 中国モダニズム研究会（2013）：**施蛰存、穆時英**
- 城山拓也（2014）：**張資平、劉呐鷗、戴望舒、穆時英、郭建英**

二 広義の中国モダニズム研究

1 左翼系作家の研究

- 小谷一郎：**創造社、陶晶孫**
- 中村みどり：**陶晶孫**

2 国民党系作家の研究

- 中野知洋：**曾今可、王平陵**
- 高橋俊：**黄震遐**

3 京派作家の研究

- 松浦恆雄：**廃名、汪曾祺、穆旦**
- 津守陽：**沈從文**（40年代）

三 中国モダニズムをめぐる視点

1 鈴木将久『上海モダニズム』（中国文庫、2012年）

- 中国の正統的な文学史では、中国近代文学の主流はリアリズム文学であり、モダニズムは一部で流行しただけの傍流に過ぎないとされる。そうした正統的な文学史を支えているのは、社会主義リアリズムを頂点とする歴史観であり、現在では異なった観点も現れてはいる。
- 他方で、日本の読者が一般にモダニズム文学として想起するのは、西洋のいわゆるハイ・モダニズムであり、中国の作品を思い浮かべる人はほとんど皆無である。エズラ・パウンドが中国の漢字に関心を持ったことは知られていても、それを契機に中国のモダニズムに関心を広げる人はほとんどいない。

三 中国モダニズムをめぐる視点

- つまり中国モダニズムは、中国文学史の流れからも、モダニズム文学の流れからも、二重に周縁化された存在といえる。中国モダニズムを考えることは、周縁化されたマイナーな存在への注目だというべきかもしれない。それに何の意味があるのかという論難に、身構えることになりがちである。
- 確かに中国のモダニズムに独創的な実験はほとんど見出せない。中国モダニズムとは、中国社会全体が近代を迎え、西洋文化を自分のものにすべく努力したとき、社会と歴史の大きな激動を、西洋モダニズムの新奇な方法を用いて表現しようとしたテキスト群であったというべきである。
- **中国モダニズムを、単に欧米のモダニズムの二番煎じと片付けるのではなく、中国を含む後発国の近代化の刻印として評価する視点。**

三 中国モダニズムをめぐる視点

2 松浦恆雄「汪曾祺と新筆記小説——中国小説の「現代化」をめぐる」(『日本中国当代文学研究会会報』第10号、1995年)

- 過去の小説の言葉との訣別をセンセーショナルに提起したのは、第一次大戦後の文学のアヴァンギャルドたちである。彼らのモダニズム文学は、理性の普遍性への懐疑に出発し、理性の介在しない深層心理や存在自体の恣意性に、人間の本来的なあり方を求めようとした。つまり、描写対象である出来事を「事件」としてとらえるのではなく、出来事をその構成要素である「コト」そのものとして、あるいは「コト」同士の関係性としてとらえようとする態度である。

三 中国モダニズムをめぐる視点

- 二十年代末から三十年代にかけて、中国の文壇に登場した新感覚派や現代派の小説は、ヨーロッパや日本の新興文学の影響を受け、現代都市の生み出した新しい人間関係や社会現象に対応すべく、斬新な表現の力を借り、都市独特の情緒を掬いとろうとした。しかし所謂現代派の小説の大半は、やはり五四以来の、小説におけるストーリーの優勢から脱することはできなかったと言ってよい。

→その一方で、廃名、沈從文、汪曾祺ら「京派」の作家たちは、「新感覚派」、「現代派」とは異なる形で、五四以来の理性中心の小説から脱却を図ろうとしていた。

- **中国モダニズムの範疇を、「新感覚派」「現代派」だけでなく、中国文学の伝統を継承する人々にまで広げる視点**

三 中国モダニズムをめぐる視点

3 城山拓也『中国モダニズム文学の世界——1920、30年代上海のリアリティ』（勉誠出版、2014年）

- 穆時英を代表とする中国モダニズム文学は、特に1980年代以降、本国中国において大きな注目を浴びてきた。しかしながら、彼らの文学作品は、文学史における一流派、あるいは資本主義社会下の流行の産物など、一貫して文学史の傍流として位置付けられてきたこともまた事実である。

三 中国モダニズムをめぐる視点

- (その一方で、) 本書におけるモダニズムの潮流は、中国新文学史の一支流でも、資本主義社会の下の流行の産物でもない。むしろ、先行研究における文学のパーспекティブからは見えてこなかった、新しい文学の可能性を示すものと位置付けたい。別の角度から言えば、本書で用いる限りのモダニズムとは、中国現代文学研究が基づいてきた文学の前提を相対化するための、仮説的な概念ということである。
- **中国モダニズムを一過性のものと捉えず、1940年代以降の中国文学・芸術を準備したものと位置付ける**

四 新たな研究動向

- 大東和重・神谷まり子・城山拓也編『**中国現代文学傑作セレクション——1910-40年代のモダン・通俗・戦争**』（勉誠出版、2018年）
- 第一部（モダン）：陶晶孫、劉呐鷗、穆時英、邵洵美、郁達夫、滕固、葉靈鳳、施蛰存、沈從文
- 第二部（通俗）：孫了紅、顧均正、歐陽予倩、徐卓呆、汪仲賢、周瘦鵑、程瞻蘆、畢倚虹、朱瘦菊、張恨水
- 第三部（戦争）：張天翼、蕭紅、王平陵、黃震遐、張資平、洪深、穆時英、陶晶孫、瞿秋白

四 新たな研究動向

- 濱田麻矢・薛化元・梅家玲・唐顥芸編『**漂泊の叙事——1940年代東アジアにおける分裂と接触**』（勉誠出版、2016年）
- 戦火の続いた一九四〇年代は、中華圏にとって大分裂の時代、漂泊の時代であった。多くの人々が流浪を余儀なくされた結果、表現者たちはさまざまなジャンルにおける多様な叙事を生み出したが、そうした作品そのものもまた、しばしば政権による分断を超えて遥かな旅をすることになった。
- 共同研究の過程で、一九四〇年代は多種多様な価値観がさまざまなメディアの上で互いに影響を及ぼしあい、また流動性をはらんで、独自の進化を遂げていたことが明らかになった。また四〇年代文学の可能性とは、まさにこの分裂の中から生まれてきたこと……（後略）
- **中国モダニズムも、1940年代前後に断絶したと見るのではなく、いかに変容し、継承したのか跡付けることができるのではないか？**

おわりに――ふたたび、中国モダニズムをめぐる視点

• 中国モダニズムを、戦間期の欧米モダニズムに影響を受けた文学（「新感覚派」、「現代派」）と考えたうえで……

1 中国モダニズムを、単に欧米のモダニズムの二番煎じと捉えるのではなく、中国を含む後発国の近代化の刻印として評価する

2 中国モダニズムの範疇を、「新感覚派」「現代派」だけでなく、中国文学の伝統を継承する人々（「京派」の作家など）にまで広げる

3 中国モダニズムを一過性のものと捉えず、1940年代以降の中国文学・芸術を準備したものと位置付ける